

源平の争乱

平清盛ら平氏一族の勢力は全盛を迎え、国家をほとんど意のままに動かすことになった。しかし同時に反平氏の激しい反発を招き、やがて全国的な争乱に発展することになる。争乱は源氏 VS. 平氏の戦いとして一般的に認識されるが、それは一面に過ぎない。源氏以外にも寺院や各地の軍事貴族が平氏に対して挙兵した。

○内乱と平氏の滅亡

●あわただしい遷都

1180年、^{あんとく}安徳天皇が即位すると、反平氏の気運はますます高まった。

→後白河上皇の子⁽¹⁾ _____ は⁽²⁾ _____ に促されて、

全国の源氏に挙兵を呼びかける命令文書^{りょうじ}令旨を発した。

⇒(1)の挙兵自体は失敗に終わったが、その波紋は全国に広がった。

◇令旨…親王などの命令文書／^{せんじ}宣旨…天皇（天皇の意を伝える朝廷）の命令文書／
院宣…上皇（院）から天皇・朝廷への命令文書



平清盛は敵対する寺院から離れるため、また、専制体制を固めるため、
^{せつつ}摂津国の⁽³⁾ _____ へ遷都を決めた。

⇒平氏一族内からも新都反対の声が強く、数ヶ月で平安京に都を戻した。

◇「治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍りき。」（鴨長明『^{ほうじょうき}方丈記』）

◇都を戻した後、^{たいらのしげひら}平重衡は反平氏の興福寺・東大寺を焼打ち（南都焼打ち）



図1 以仁王

●内乱の開始

1180年、以仁王の挙兵は失敗したが、各地の源氏に動きが見られた。

→平治の乱で伊豆国に流刑された⁽⁴⁾ _____、

信濃国で勢力を広げていた⁽⁵⁾ _____ が挙兵した。

⇒6年にわたり、⁽⁶⁾ _____ と呼ばれる全国的な争乱が続いた。

◇(4)…挙兵した初の合戦で敗れ、敵方の^{かじわら}梶原景時の情けで生存



図2 源義仲（木曾義仲）

●平氏の都落ち

1181年に起きた2つの出来事で、平氏の基盤は弱体化した。

①平清盛の急死②畿内・西国を中心とする^{ききん}養和の飢饉



1183年、源義仲は北陸道の^{くりからとうげ}倶利伽羅峠の戦いで平氏を破った。

⇒平氏は平安京を離れ、安徳天皇とともに西国へ向かった。



都入りした義仲とその家人の評判は悪化の一途を辿り、やがて孤立した。

⇒その間に源頼朝は、後白河上皇と交渉して^{しゅえい}寿永二年十月宣旨を得て、
朝廷への税納入を保証する代わりに東国の^{ききん}実質的な支配を許可された。

◇当時、争乱や^{ききん}飢饉で東国の荘園・公領からの税納入が停滞



頼朝の弟源範頼⁽⁷⁾ _____ は、宇治川の戦いで⁽⁸⁾ _____ を討った。



図3 高熱を冷ます平清盛



図4 火牛

●平氏の滅亡

源氏は1184年、摂津国の一の谷の戦いで平氏を破り、
さらに1185年、讃岐国の⁽⁹⁾ _____でも平氏を破って追い込んだ。

1185年、源氏は長門国の⁽¹⁰⁾ _____で平氏を滅亡させた。

◇安徳天皇は(10)の際に、三種の神器のうち宝剣と勾玉を抱えて入水



図5 三種の神器



図6 倶利伽羅峠の戦い（火牛の計）



図7 平氏の都落ち



図8 宇治川の戦い（左：巴御前）



図9 一の谷の戦い（鶴越の逆落とし）

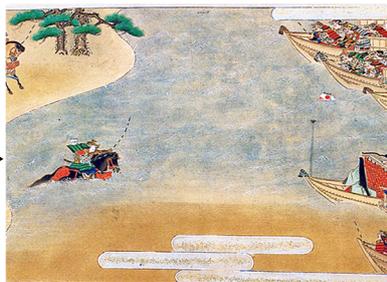


図10 屋島の戦い（那須与一と扇的）



図11 壇の浦の戦い（平氏の水軍）

自称天皇！？—長浜天皇

壇の浦の戦いで平氏は滅亡したが、今日でも平氏の子孫と称する人は少なくない。第二次世界大戦後、安徳天皇の子孫と称する天皇が現れた。長浜天皇こと長浜豊彦は硫黄島（鬼界ヶ島!?)に住み、戦後に現れた他の自称天皇とは、一線を画す風格をもっていた。子孫かどうか真偽は不明だが、硫黄島には安徳が島で最期を迎えたとの伝説がある（右図：安徳の墓）。幼年で壇ノ浦に入水した安徳には、生存説が創られるほどの魅力があったのだろう。



○中世の開始

●院政期か源平の合戦か

教科書に従えば、院政期から中世が始まる。

⇒ただし、平清盛は官職や天皇との外戚関係を重視し、古代的（貴族的）性格を強くもった。

源平の争乱は、古代（平氏）への抵抗であり、源氏の勝利こそが中世の始まりともいえる。

◇世界史の古代…476年の西ローマ帝国滅亡まで／中世…1453年のビザンツ帝国滅亡まで